

2024年2月25日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ36「わたしは主である」

レビ19:12、コロサイ3:16~17

ここにテキストを入力

問99 第三戒は何を求めていますか。

答 わたしたちが、呪いや偽りの誓いによってのみならず、不必要な誓約によっても、神の御名を冒瀆または乱用することなく、黙認や傍観によってもそのような恐るべき罪に関与しない、ということ。要するに、わたしたちが畏れと敬虔によらないでは、神の聖なる御名を用いない、ということです。それは、この方がわたしたちによって正しく告白され、呼びかけられ、わたしたちのすべての言葉と行いによって讃えられるためです。

「呪いや偽りの誓い」「不必要な誓約」とは何でしょうか。ある解説書では、この信仰問答が作られた16世紀の時代に言及して、この時代は「過度で口汚い呪いを好み」また「神の名や聖者の名を呼びながら誓うこと」が好まれていた。そして「神の名を呼ぶことにインフレが起っていた」と表現しています（『信じるということ』A. ラウハウス）。インフレとは物の値段が上がり、お金の価値が下がることですが、神さまの名が頻繁に登場し、乱用されることで、その価値が下がるということです。なかなか的を得ている表現です。

これはわたしたちと無関係なことでしょうか。例えば、その言葉を言えば、あるいはその言葉を書けば、それで信仰的なことになるかのような感覚があります。手紙の最初に「主の御名を賛美します」とよく書きます。わたしも書きます。教会の出す正式な文書や改まった手紙などには必ず書きます。でもそこで一瞬立ち止まることがある。ただこれを書けばいいということになっていないか。主の名を用いるのであれば、そこにそれ相当の思いを込める必要があります。もし、それが常套句のようになっていたら、それこそ神さまの名の乱用であって、その言葉は不信仰な自分を偽るものになっていると考えるべきです。時に、わたしたちは美しい言葉、心地よい言葉で自分を偽り、装うことがあります。ともすると神さまの名を持ち出してきては自分を装い正当化するのです。そのように自分でも気づかないうちに神さまの名を誤用、乱用、悪用する恐れがあることをこの信仰問答は教えています。

「名」は単に言葉の問題ではありません。「名は体を表す」と言うように、その名を持つ人自身、そのものを示します。神さまの名を軽く扱うということは、神さまご自身を軽く扱うこと。まるで神さまを自分の意のままに動かそうとすることなのです。このような神さまとの関係はわたしたちの人間同士の関係にも現れてまいります。神さまを軽く扱う人は、隣人のことも軽く見るようになるでしょう。また人を自分に都合よく利用したり、意のままに動かすような失礼なことを平気でしてしまうようになるのです。勝手に誰かの名を使って人を信用させ悪いことをするようなことをすれば、それはその人の尊厳を著しく損なわせることになります。まして神さまに対してはなおさらのことです。ですからこれは決して軽い問題ではありません。全力で阻止しなければならぬことなのです。

問100 それでは、呪いや誓約によって神の御名を冒瀆することは、それをできうる限り阻止したり禁じたりしようとする人々にも神がお怒りになるほど重い罪なのですか。

答 確かにそのとおりです。なぜなら、神の御名の冒瀆ほどこの方が激しくお怒りになる罪はないからです。それゆえ、この方は、それを死をもって罰するようにもお命じになりました。

「死をもって罰する」それほど重いのです。この部分の参照聖句にレビ記があげられておりますが、神さまの名を冒瀆した人が石打ちの刑に処せられるという話です。神さまを軽んじ、自分の意のままに動かそうとする。それは神さまをないがしろにしていることに他なりません。極刑をもって償わなければならないことなのです。わたしたちはその罪の責任を負わなければならない

けれども、わたしたちに代わってイエスさまがこの死ぬべき罪を負ってくださいました。この極刑をわたしたちに代わって引き受けてくださった。それが十字架の死であります。特に受難節にある今、わたしたちは知らず知らずのうちに神さまを軽んじ、ないがしろにしていること、そのような恐ろしい罪を重ね続けていること。それでもイエスさまがこの罪を負ってくださいました。十字架で死んでくださったことを心に留めて、一層、悔い改めに生きる必要があります。そしてこれ以上、この罪に加担しないように自らを律することが求められています。しかし、これは自分の努力でそうするというよりも、この罪からわたしたちを自由にしてください、正しく御名を呼ぶ新しい命を与えてくださったイエスさまの救いによるものであることを何よりも覚えなければなりません。そもそも神さまはどうしてご自分の名をわたしたちに示されたのか。それは問9 9にありました「この方がわたしたちによって正しく告白され、呼びかけられ、わたしたちのすべての言葉と行いによって讃えられるため」なのです。

モーセの召命のところで、モーセがエジプトの人々に神さまの名を尋ねられたら何と答えましょうかと神さまに尋ねます。その時に神さまは「わたしはある。わたしはあるという者だ」(3:14)とお答えになりました。わたしたちは自己紹介をする時に名前を言います。そこで人格的な交わりが始まります。神さまがわたしたちに名を示されたのは人格的な関係を結ぶことに他なりません。

しかもこの名は「ある」これは「存在する」「あらせる」「いきている」という意味です。つまり神さまは生きておられ、またわたしたちを生かすお方です。わたしたちをお造りになられ、存在させる、すべての根拠、創造主、救い主であることをこの名は示しています。そしてそのことはイエスさまの救いによってはっきりとわたしたちに示されました。罪ゆえに神さまとの人格的な交わりを失っていたわたしたちがイエスさまの十字架とよみがえりの御業によって再びその関係を回復されるのです。

レビ記19章に「わたしは主である」とあります。これは「わたしはヤハウエである」という言葉です。神さまはその名を示されご自身を余すところなくお示しになりました。そのように人格的な交わりを与え、御前に生かし存在させてくださる救いがイエスさまによってもたらされました。だからこそ、わたしたちはこの方の御名を乱用するのではなく、正しく呼びかけ、そのすべての言葉と行いによって神さまを讃えることができるのです。

天の父よ。あなたの聖なる御名を乱用し、利用しようとするこの恐ろしい罪をお赦してください。イエスさまがわたしたちに代わってこの罪を背負い十字架で死んでくださいました。それゆえにわたしたちはもはや神さまの名を汚すのではなく、正しく呼ぶ者とされています。どうぞわたしたちの言葉と行いをもってその聖なる御名を讃える者としてください。主の御名によって祈ります。アーメン。